

文化高知

2005年 3月 NO.124



「風景（仁淀川）」 和田通博

〈もくじ〉

フラダンス 神話を踊る	ルアナ中川	2
「ジョン万映画」に捲きこまれて	山田まさ子	3
いつまでたってもビートルズ?!	森 薫	4~5
賢者は歴史に学び、愚者は経験に学ぶ	岡村 真	6~7
太郎が笑った日	濱田善久	8~9
「武政英策資料目録」発刊に寄せて	曾我部修	10~11
鏡川雑想一仕事の合間、窓越しに思うこと	藤田雅子	12
市民が歌う第九シンフォニー		13
風俗歳時記・風伯		14~15

(財) 高知市文化振興事業団

フラダンス 神話を踊る

ルアナ中川

ハワイにはたくさんさんの神話があり、人々はそれを言葉(祝詞のような詩)にし、フラ(ダンス)を使って伝承してきました。十九世紀初期までハワイには文字がなかったからです。

フラはハワイアンソングの言葉を、観る人に説明するように踊っています。内容は、大自然をモチーフにしたもの、人々の愛や心を表現したものも多く、中でも古代の王や先祖の偉大さ、神々への畏敬の気持ちを表現したものがたくさんあります。

踊り方は、イギリスのジェームス・クックにハワイが発見される前と後で、おおむね古典風と現代風に分けられます。どちらも特徴がありワクワクしますが、私は、迫力があり勇壮な古代の民族的文化を魅力的に表現する古典の踊りに惹かれます。

さて、フラの中では一番人気の火山の女神ペレにまつわる話の中で、

次のようなものがあります。

ペレは気性が荒くわがままで、神々や自然界、そして人間に対してペレの発する言葉は最後通告であるときさ理不尽であろうとなかろうとだめなものだめで、冷酷にふるまうので恐れられています。しかし、時として若い娘に姿を変え、優しい言葉をかけたり、恋をしたりします。

ある時、ペレはカウアイ島に住む若くてハンサムな王子ロヒアウに恋をします。ロヒアウは美しい娘に姿を変えたペレに、ペレとは知らず心を寄せるようになりませんが、飽きやすいペレはハワイ島の自分の棲家ハレマウマウに一人で帰っていきまじ。しかし、ペレはロヒアウを忘れることができません。彼をカウアイ島から呼び寄せたいのですが、誰も呼びに行ってくれる人はいません。それもそのはず、ハワイの島々には悪

霊や化け物がたくさんいるので、行くのは命懸けだからです。しかたなくペレは兄弟の中でも一番大切に思う愛しい妹ヒイアカなら言うことを聞いてくれると思いい、自分の思いをヒイアカに託します。ヒイアカは大好きな姉ペレの頼みなら命を捨ててもと決心し引き受けます。

ペレは、ロヒアウと口をきいてはいけないこと、四十日の間にロヒアウを連れて帰ることをヒイアカに約束させます。ヒイアカは、交換条件として、親友のホーポエの「レファの森」をペレの火で焼かないでほしいと頼み、重い足を進めます。ヒイアカとロヒアウの二人は悪魔と闘いながら、命からがらやつの思いでハワイ島へと帰ってききましたが、約束の四十日は過ぎていました。親友ホーポエの「レファの森」も焼けてしまい、溶岩の海と化しています。

ペレは、約束の四十日が過ぎたので妹ヒイアカがロヒアウを取ってしまったと嫉妬し、怒りで火を吹き上げたのです。ヒイアカは失望と怒りの中、苦難の道をともしてきて今は愛しく思っているロヒアウと、ペレの面前で抱き合います……この後も話は続きますが、今回の主題は、ヒイアカの親友ホーポエについて。「ホーポエ」……この歌は神が泣

か、研究者はため息まじりで問うた。ひっそりと終わった他の漂流仲間と、ジョンはどう違ったのか。

中の濱は、中村市からバスで足摺岬へ向かい、そこからさらに小型バスに乗った所であった。車窓に、木々がぐっと迫ってくる。

海に突き出た谷あいの村。

「鯨が、この前、網に偶然入ったきに、食べたぜよ」と、村の人が笑顔で話してくれた。

父を亡くしたマンジロウ少年が裸足で駆け下りたであろう家までの山道を、わたし達も辿ってみた。

マンジロウをつかまえた神波氏が電話をくれたのは、フェアヘブンのからの帰りであった。まだ時差ボケの残るまま彼は写真の束を持ってきた。

「これだ、教会の写真を見てくれ」コングレゲイションナルチャーチであった。当時は、一大勢力の教会だったという。ウイリアム・ホイットフィールド船長は、この教会へマンジロウを連れて行った。席に腰をおろすなり、教会の執事が飛んできた。

「ニグロと見まがう少年を、同席させることは出来ません」船長は、マンジロウと教会から出

く声まで詩にしており、詩に盛り込まれた神話を髣髴させる情景がリアルで、初めて聴いたときはとても驚き、感動しました。作者はフランク・ヒューイット。ハウハウ ウエー、ハウハウ ウエーとホーポエは泣きながら、プナの地を追われていきます。遠い神話の世界の神聖な出来事が、あまりにもドラマティックなために一瞬にして骨肉生々しい人間くささに変わっています。私たち人間への戒め、教訓のようなものをフラの踊りを通して表現しているのです。さて、私たち「ルアナと楽しい仲間たち」は、来る五月五日、高知県民文化ホール・オレンジで、たくさんフラダンスに交じって「ホーポエ」を踊ります。ペレの燃え盛る炎威圧的なペレの踊り、その火に焼かれながら大地を追われるホーポエなどを演じます。ぜひご覧くださいませ。すようご来場をお待ちしています。るあながわ/ルアナと楽しい仲間たち



火山の女神ペレの花ともいわれるレファの花

て行った。決然とした歩みで。

「ジョン・マンは、死をかけた捕鯨の友だ」

船長は、ユニテリアンチャーチに宗派を変えた。日本では考えられないほど大変なことであった。フェアヘブンはニューイングランドに位置し、イギリスで宗教的迫害を受けた清教徒が移り住んだ所。町の人は日曜日には酒も飲まないほど信仰心が篤い。先祖が決めた宗派を変えれば、今までいた教会やそこに通う町の住民を怒らせることになる。難破船から拾ってきた異国の色黒い少年の為に、船長以外の誰が、これだけのことをしてくれるだろう。友以外の誰が。

「結局、メリケと日本をつないでるのは、ウイリアムとジョンのハートぜよ」と、すっかり板についてきた土佐弁で、神波氏は語るのであった。ウイリアムがいなければ、ジョンはいなかった。漂流した海で船長が助けてくれたのは、いのち以上のものであった。フェアヘブンのお祭りは、あのとき教会を毅然と出て行った船長の心意気をも伝えている。

今春シナリオは完成、下戸で砂糖をかじっていたマンジロウを偲んで、師弟はジュースで乾杯をした(というこになっちゃう)。 (やまたまさ子)

「ジョン万映画」に巻きこまれて

山田まさ子



十月、マサチューセッツ州フェアヘブンの街路樹があでやかな黄色に染まる頃、街の人達は二年に一度のジョン万祭りを楽しむ。マンジロウは石造りの家々や入り江、歴史のある港町にすっかり馴染んでいる。

さあ幕末に海を越えて敬愛された男を、映画にどう描くか。

シナリオライター神波史男氏が、頭をかかえたのは去年の初頭だった。高知の出だという理由で呼び出されたわたしは、氏の嘆きをきかされた。

「マンジロウというのは、酒も飲まねえんだな。浮いた噂ひとつない」

中の濱で極貧の家に生まれたマンジロウは、帰国後、航海学書を翻訳し、人を育て自らは政治の表舞台に立たない。人として謙虚であった。

隙がなく、早い話が、シナリオライターにとってやりにくい。生身の体温が伝わりにくい。

「龍馬と話をさせよう」

神波氏は言い出した。

「マンジロウが心許して世界を語れるのは同郷の龍馬しかない」

むろん、マンジロウと龍馬が語らったなどという資料はないから、これは映画上のフィクションになる。

春、神波氏とわたしは、高知へ飛んだ。マンジロウの船出した宇佐の浜辺へ案内して下さったのは、マンジロウに惹かれるあまりフェアヘブンへも旅に出た研究者である。

夕暮れの浜辺であった。研究者は、小高い丘を指差し、

「あそこに伝蔵の墓があります」

「マンジロウと一緒に漂流した仲間ですね」

「そう。僕はマンジロウのファンやけん、時々マンジロウになれなかつた男のことを思うがです。あの墓に眠る影のような伝蔵の人生を」

なぜ、マンジロウになれなかつた

いつまでたってもビートルズ?!



森 薫

一九五〇年(昭和二十五年)生まれの僕らにとって、ビートルズの存在とは、いったい何だったろうか? 否、まだ残された二匹のビートルが頑張っているのだから、まだまだ歴史は続いているのであるが、これほどまで、僕らに影響を与え続けている彼らの存在とは何なのだろうか?

ブリーズ・ブリーズ・ミー
1964年

初めて聞いた時の衝撃はすさまじかった! 小学生のころからアメリカン・ポップスは聴いていたのだが、その時彼らから受けた衝撃には、到底及びもしなかった。

僕らはかなり興奮していたが、日本では「こんにちは赤ちゃん」「高校三年生」が流行っていた時代であり、まだ一部の熱狂的なファンだけの世界だった。その当時の時代性(世

の中が「ゆったり」としていたにもかかわらず、かなりの偏見や誤解があった)もあり、よう不良になりきれず、心の内の興奮をストレートに発散できなかった。だから、不完全燃焼のまま、もやもやしたものが現在まで続いているのかもしれない。

ヒヤー・ゼアー・アンド・エヴリウエア
1966年

極東に興味を持っていた彼らは破格のギャラで来日した。

すでに僕らは高校生になっていたが、まだまだ武道館ははるか遠い存在だった。

しかし、イギリスのリバプールの港から日本の高知の港へ、彼らの音楽は確実に届いたわけだから、どこにいても、世界のどんな場所においても、彼らの音楽は届いていたはずだ。後日、いろんな仲間と同じ経験を話

し合ったことがあるが、言葉や環境が異なっても、同じ感性を持つ者には確実に届くものだ、妙に納得したものだ。

逆に、インターネットもメールもない時代にこそ、届くものがあつたのではないかとさえ思った。

スターティング・オーバー
1980年

一九八〇年十二月八日ジョン・オノ・レノンが凶弾に倒れる。

五年間の子育てを終え、音楽活動に復帰する矢先の出来事だっただけに、世界中のファンは「抛りどころ」を失ってしまった。当然、僕たちもショックで落ち込んでしまい、やり場のない憤りを感じたものだった。

司馬遼太郎さんの「竜馬が行く」を信奉している、竜馬ファンの気持ちに通じているところがあるかもしれない。昨年出た「ラブ・アンド・ピース ぜよ八坂本竜馬はジョン・レノン?」という本の中の強引な付録で、高知龍馬空港とジョン・レノン空港(リバプール)を対比させていたが、大政奉還で無血戦争を説いた竜馬と「イマジン」や「ギブ・ピース・ザ・チャンス」で平和を訴えたジョン、なんとなく似ていると思いませんか。

シーンが流れ出した歴史的瞬間であった。

ポール・マッカートニー・ドライヴ イング・ジャパン 2002年

大阪ドームの遠い席で、初めて「彼」の音を聞いた。冷静に聞いていたつもりであったが、初期のナンバーを聞いているうち、いろんなことが走馬灯のように駆け巡り、思わず泣き出しそうになった。

僕らの正しいビートルズ学 2003年

高知市文化振興事業団から市民講座で「彼ら」をやりたいと要請を受けた。

とても面白い企画だったが、はたして彼らで大丈夫? はたして僕らで大丈夫? と少し考え込んでしまった。が、ふたを開けて見ると、定員三十人はすぐいっぱいになり、平均年齢四十九歳の同窓生は、懐かしいノスタルジアを共有したのであった。

ザ・ビートルズ・ボックス05 2005年

そして二〇〇五年三月二十一日、

イマジン 1990年

諸事情により高知へUターンして友人たちと映画「イマジン」を自主上映した。それを機会に「ビートルズ倶楽部」を結成した。

上映会は、「イマジンでイブシよ」 という甘いキャッチフレーズだったが、あまりの観客の多さにRKCホールの映写機がオーバー・ヒートするほどだった(入場者千人余り)。

基本的に自分たちで見たいもの、聞きたいものを高知で作っていかうというスタンスで立ち上がったが、いろんなフリークな仲間が集まりだし、面白い集まりになっていった。

九二年「ア・ハード・デイズ・ナイト」、九四年「バック・ビート」と二年おきに映画を上映し、その後は彼らにちなんだコンサートを毎年続けている。

ザ・ビートルズ・ボックス99 1999年

妙な縁で「こうち元気者交流会」(高知県の委託事業)のメンバーと知り合い、共催でこの音楽祭を行った。いろんなジャンルの音楽家(十二組)に集まってもらい、彼らの楽曲を楽しもうというこの企画は、ミ



ザ・ビートルズボックス99 (追手前高校芸術ホールで)

ロンドン・リバプール・ヒステリーツアー 2000年

レニウムに向けて大いに盛り上がりを見せた。この資産が高知街ラ・ラ音楽祭へと発展していこうとは、その時誰が想像できたであろうか。

年齢が五十才、長年の夢だった聖地参りを、意を決して敢行することになった。

ロンドンも遠いが、その先のリバプールはまだまだ遠い。いろんな書籍を漁っている時、偶然司馬さんの「街道を行く愛蘭土紀行」に出合った。その本の中で、安部氏(現リバプール観光局勤務。リバプール在住三十年)が司馬さんを案内したことを知り、早速安部氏にファックスした。聖地案内をタイミンク良く快

諾してくれ、これが大正解であった。別れ際に、土佐のお土産(枳、土佐鶴の若村真由美のカレンダー)を市長に渡したいと言ったら、わざわざリバプール市役所まで同行してくれ、表敬訪問させてもらった。

現在も安部氏とは交流があり、最新のリバプール日本語ガイドブックが届いている。

高知街ラ・ラ音楽祭 2002年

ビートルズ・ボックス99のスタッフだった故堀田氏が、仙台で盛り上がっている「定禅寺ジャズ・フェスティバル」の話聞いてきたのが、事の始まりだった。

「ぜひこれを高知でやってみよう」と熱く語った堀田氏の元へビートルズ・ボックス99を中心としたスタッフが集まり、トン拍子に本音楽祭が開催された。

この年は高知で国体が開催されており、県外からのお客さんたちへ絶好のウエルカムにもなった。高知の街へ新しい音楽



リバプール市役所を表敬訪問。中央は助役さん

が催された。この年は高知で国体が開催されており、県外からのお客さんたちへ絶好のウエルカムにもなった。高知の街へ新しい音楽

高知市文化振興事業団の「高知のアーティスト」事業の一環として本企画が開催される。九九年年度版より少し規模は小さいが、ブルーズ、ジャズ、クラシック、ロック、ワークシヨップと五組の様々なビートルズ・ワールドの箱が開かれようとしている。ロビーでは、高知街ラ・ラ音楽祭の写真集や秘蔵フィルムが上映されるようだ。みなさんぜひ遊びに来て、楽しんでみてください。

いつまでたっても、いくつになっても「彼ら」とは離れられない仲に落ちてしまった。すべて彼らのせいである!

(もりかおる/ビートルズ倶楽部)

賢者は歴史に学び、 愚者は経験に学ぶ

—南海地震と災害伝承—

岡村 眞

10年前の災害さえ伝えられない

昨年の十月、フィリピンのミンドロ島を調査した。広島大学、高知大学それにフィリピン科学技術庁火山地震研究所との共同調査である。この島の北岸は一九九四年に発生したマグニチュード7.4の地震に伴い、沿岸部に最高六メートルの津波が襲った。そのうち、訪ねた集落では約八十人の住民のすべてが死亡したとされる。集落は海岸から約四百メートル離れてはいるものの、満潮時の海面からの高さは一メートルに満た

ない。ニッパヤシの生い茂る浜堤上の集落で、ヤシの葉先は地上から約六メートルの高さまで延びるため、家々から直接海を見ることはできない。

現在はこの集落に約百人の人々が暮らしており、調査の手始めとして聞き取り調査を行おうとした。しかし、調査を始める前にかじりめ想像されたことではあるが、現在の住民の誰も、かつてここに住んでいた人々すべてが流されてしまったという事実を知らなかった。そこに土地があったから移住してきたのであり、

壊れたブロック塀などがあっても、それが津波で壊れた残骸であるという解することはできていないらしい。結局、ここでの津波の実態調査はできなかつた。

昭和南海地震は伝えられているか

高知県の太平洋岸は過去の南海地震津波のたびに八百人を超える死者を数えてきた。しかし、自分の住んでいるところにはどのような揺れが襲うか、また、その後の津波で家ごと流されてしまう可能性が高い、とい

うことを理解している人は必ずしも多くはないことが、我々の行っている聞き取り調査で明らかになってきた。

昭和南海地震の津波の経験者（当時十歳以上、現在六十九歳以上）は、土佐市宇佐町では調査した八十四人中四十七人に過ぎず、須崎市池ノ内では百四名中三十九人しか津波が来たことを知らなかった。その理由は、戦後あるいは昭和南海地震後にそこに移り住んだからだ、と調査で答えている。少数ではあったが津波に懲りて、居住地を替えた人もいる。し

かし、住人の約半数は、将来そこで起きることを理解できないでいる。なかには昭和南海地震を経験した故に、あつたときこまでは津波は来なかつた、あるいは揺れは大したこと

はなかつたと、ただ一回の経験をもとに将来を楽観している人もいる。実は、昭和南海地震は過去の南海地震の中では例外的に小さかつた、と知る人は多くはない。「賢者は歴史

に学び、愚者は経験に学ぶ」とは防災に関する名言である。

百年後の住民のために

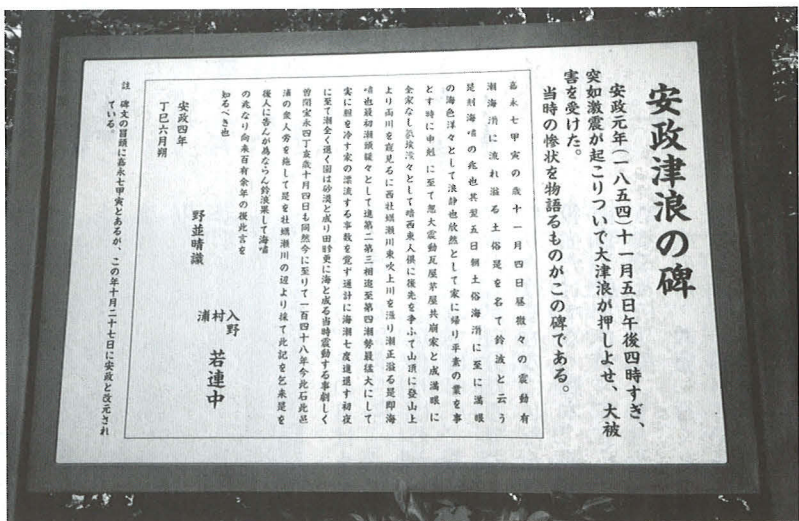
県内にある多くの「賢者」のいしぶみ（碑）の中でも、大方町入野の松林の中、加茂神社の境内に建つ碑文は読んだ人に感激を与える内容である（碑文自体は苔むしているため読みづらく、それを書き写した横の看板

内容が要約すると、嘉永七年（後の安政元年）十一月五日（新暦では十二月二十四日にあたる）のいわゆる安政南海地震津波の前後の記述から始まる。この地震の約二十八時間前に緩やかな揺れがあり、低い津波がやってきた（前日、中部地方から近畿地方南部で発生した安政東南海地震のことと思われる）。

その翌日五日午後四時過ぎ、大地震が

やってきた。揺れは激しく瓦家、茅葺の家など一軒も残らずつぶれて埃が舞い、あたりが暗くなつた。人々は我さきに山の上へ逃れた。山の上から下を見渡すと、入野の集落をはさみ込むように、両側の川から津波がやってきた。第一波はゆっくり進んできた。それから第二波、第三波と続き、第四波が最も激しく、この津波で数え切れないくらいの家が流されていった。津波は合計七回やってきた。深夜になって潮は引いていった。

調べてみると、このようなことは宝永四年にもあつて、今回は実に百四十八年ぶりの出来事であつた。そこで後のひとに伝えるべくこの石を村の若い人と採ってきて、このことを書いていく。大地震大津波の前には小さな津波がやってくる。これは前兆ととらえよ。このことはこれから百年後に役にたつであろう。



大方町入野の浜、加茂神社境内にある安政地震津波の碑の写し文。大方町役場から南へ約300m離れた松林の中にある



太郎が笑った日

日高村立日下小学校六年生三十二名で取り組んだ演劇の題名である。

そもそも、総合学習の時間に演劇を取り入れようとしたのにはいくつかの理由があった。

ある日、保護者のひとりから「今から学校に行って校長と話があるから一緒に来てくれないか？」という連絡があった。この学校のPTA会長をさせていたでいてるわたしには断る理由もなく、何事かと思ひ駆けつけた。その保護者の話を要約するとこういうことだった。

「最近、どうもクラスでいじめがあったって、うちの子がいじめられている側みたいだ。もう学校には行きたくない。転校したい。そう言ってる。その原因を究明して、もしいじめた側が分かたら謝りに来る」ということだった。

て欲しい」。

そんな一方的な！と心の中では思いながらも、クラスであった小さな事件を担任から聞き、保護者に対する現況報告のなかったことをわびてもらい、これからは学級通信などで逐一お知らせすることを約束してもらって一応その場は落ち着いた。しかし、子どもたちの間では、そんな些細な事でも大げさに言えば派閥争いみたいなことが蓄積してきており、このままではまた同じことを繰り返さないとも限らないという状態だった。その保護者が帰った後、校長と担任の教師といろいろと話合ってみた。

そして、わたしが学校のためにどうか、学校の子どもたちのために何かできることがあるとしたら、お芝居作りくらいしかアイデアがなく、その方面なら少しはお役に立てるかとも思い、総合学習の時間をいただける運びとなったのだ。

太郎が笑った日

二学期の中ごろ、教室に向いいていくと、クラスの子どもたちはきよんとしていて、今から何が始まるのだろうかとお心配そうにわたしを見ていた。自己紹介も早々にさっそくお芝居作りの流れを説明して、取り組み始めた。台本はもともとオリジナリティであったものをアレンジするというやり方で進めるつもりだったのだが、クラス全員で取り組むためには配役を増やすことや内容をもっと自分たちの身近なものに変える必要があったので、まずそのことの話し合いから始めることになった。

我慢我慢と自らに言い聞かせ：

子どもたちの話し合いというか、アイデアの出し合いというか、出てくる内容は全くもってまとまりのないもので、その役を自分たちで演じるという自覚のない無謀なものが大半だった。それでもここでわめくわけにもいかず、出ただけ出してみろ！



という感じ。その日はまとまりもせず終わってしまった。

今回の芝居作りはわたしが主導権を握るものではなく、あくまでも子どもたちが自分たちで力を合わせて作り上げるものにしたかったので、役者だけでなく脚本、演出、大道具、音響と裏方もすべて子どもたちで決めることにした。

次の時、教室に行くと、まだ決まっておらず引き引きや多数決で決めている最中だった。それでも何とかすべての役に収まり、本格的？に動

き出した。すぐには脚本が上がるわけでもなく、脚本係になった三人の子どもたちはたぶんあれやこれやと頭を悩まして、何週間か経って脚本を上げてきてくれた。

さて、そのストーリーは

少し運動オンチな少年太郎は、運動会の二人三脚の練習でずっこけてしまう。組んでいた相手は健太というクラスのいじめっ子。学校からの帰り道、いじめっ子グループにパカにされ、太郎は学校に行きたくないと言いだす。そんな太郎の部屋に珍客のピー星宇宙人三人組が現れて…。

さあ、練習だ！

役者とはかく台詞を覚えなくてはいけない。来る日も来る日も覚えられずに進行がストップしてしまう。努力をしないわけではないだろが真剣さに欠けることがうかがえる。演出役の子は頭を抱えるし、同じ舞台に出演しているほかの役者の子は、台詞を忘れてしまった子に対しては黙って見ている。それでもわたしは黙って見ようと思った。もちろんアドバイスはするのだが、他人をとがめることがどんなに進行を遅らせるか分かってほしかった。それでも回を重ねるごとに、だん

だんと前に進んでいくのが分かるようになってきた。つまりながらも、やっとならぬうちに全編を通すことができるようになってきた。本人たちはたぶん気がついていないのだからうけど、ほかの人に迷惑をかけられないという自覚が生まれてきたようだ。ほんの少しだけ…。

時間が無い！

気がつけば、いや気はついていてただけで本番までどう考えたって時間が無い。冬休みが明けたらすぐに本番だ。先生が提案した。冬休み中に練習をしたら？

さあ、子どもたちがどう反応するか不安でもあり、楽しみでもあったが、冬休み中の二日間を練習する日にあてることになった。なんと、旅行などでいない子を除けば、ほとんどパーフェクトに近い参加人数だ。一日目に来ている子も二日目には参加している。子どもたちが声を掛

濱田善久

け合って集まってきたのには感動した。もうここまで仲間意識がわかってきたら、わたしの役は終わりのなにかも知れない。でも、そう安心もしていられない。何とか形にならなければ子どもたちががんばった甲斐がなくなってしまう。リトルプレイヤーの田村先生にも助っ人をお願いして最終の練習が始ま



終わってみて：

このクラスの子どもたちと一緒に過ごした時間は短かったけれど、最初に教室で会った時の彼らとは全く変わったと思う。舞台の全部を自分たちで役割分担し、裏方を含めて自分の持ち場に精一杯の表現をしていた。こんな特異な体験だからこそ生まれた連帯感かもしれないけれど、また日常の生活に戻ったら全然変わってないと言われるかも知れないけれど、きっと心の中の片隅にはこのクラス全員の思い出が残ってくれていることを期待しながら、こんな貴重な時間を与えてくれた関係者と子どもたちに感謝したい。

はまだよしひさ／日下小学校PTA会長

「武政英策資料目録」 発刊に寄せて

曾我部 修

武政英策先生の業績を顕彰する「武政英策資料目録」が昨年発刊された。この資料目録の持つ意味や意義、活用方法を考えると、郷土の音楽文化史として後世に残すことができる大変貴重な資料目録であり、武政英策先生からご生前ご指導やご厚誼をいただいた者のひとりとしては、この上ない慶びとしている。

また、これは、今後の高知県文化全般の振興という意味においても、大変意義深いものがあると考えている。

この目録の編纂は、平成三年（一九九一年）十二月十三日、武政英策没後十年記念コンサート「土佐ふるさとのうた」が県民文化ホール・オレンジにて開催されたことに端を発する。この折、武政夫人からの寄付残額で資料整理を行うこととなり、武政先生の資料、段ボール箱十五個分を倉庫に保管し、高知大学教育学部助教吉田孝氏が監修に当たることになった。

その後、吉田先生の二度にわたる転勤を乗り越え、入力されたデータの混乱で再確認作業に時間をとられながらも発刊にこぎつけた裏には、千五百点を超える資料の整理に当たられた前野美智氏の誠実で緻密な作業があったからこそ、ということはない。

特筆しておきたい。

ところで、いったい何が、「武政英策資料目録」編纂を提案させ実際に実行せしめたのかを考えてみると、申すに及ばず作曲家武政英策先生の「お人柄」と「作品」が、この高知県、いわゆる「土佐」の風土に、実に快く溶け込んだことの証しにほかならないと考えている。

私もかつて、NHKのテレビ放送で武政先生の作品に出演させていただいたり、先生の愛弟子のおひとりであり高知県チェロ奏者の草分け的存在である私の大先輩、吉良長幸先生とジョイントリサイタル「チェロとパルトン」による武政英策作品の夕べ」を企画したりした。その他、先生の「作品の夕べ」を企画し演奏させていただいたことも幾たびがあった。演奏する立場から先生の作品の



在りし日の武政英策

魅力について一言で述べさせていただと、それは、私たち日本人の心のよりどころとして、時を越えて今日もなお、脈々と息づいている民族的な情感を実に心得ていたところにあるといえる。と同時に、決して情におぼれ流されることのない合理的な音楽の世界観が、理性として常に根底にあったことを見逃してはなら

ない。それは、和声学に関する著書や歌曲集によっても証明されている。

今日、一般的に使われている総称「文化」の分野や領域は多岐に及ぶ。いずれの文化も、その素地は、その地方（地域）の気候風土が時間をかけて創り、熟成かつ形成され、一般的な人々によって伝承され伝統化されたところにある。それが、どのような方法で、系統的に体系づけられ

るかによって「文化」が定義づけられている。そのような観点から、武政先生は、高知県下隅々まで実にくまめに足を運ばれ、地域の「わらべうた」「しごと（労働）うた」「生活心情うた」等を採譜・整理され、それに基づいて我々に作曲・紹介された。特に「わらべうた」「しごとうた」を収集し、後世への文化遺産として我々に残してくれた業績は偉大であったといわねばならない。ちなみに、西洋音楽のシューベルトやブラームス、その他著名な作曲家たちも、民族音楽を素材とした名曲を後世に作品として多く残していることは、我々もよく知るところである。

音楽教育に、または音楽文化に携わる者のひとりとして、武政先生の作品は特に、義務教育の現場での教材や、大衆文化パフォーマンズ現場での素材として大いに活用されるべき大変貴重な音楽文化遺産であると考えている。

その意味において、この資料目録を順次ひもと

けば、愛媛県出身でありながら、武政先生が終生、土佐人として情熱を注いだ音楽創作（作曲）活動と音楽文化活動の足跡を系統的にたどることができると、また、武政英策作品・人物研究の手がかりとなるように、楽譜（オリジナル・アレンジ）、テープ類（五十音順）、その他一般資料等と、克明に分類されており、行き届いた見事な資料目録となっている。

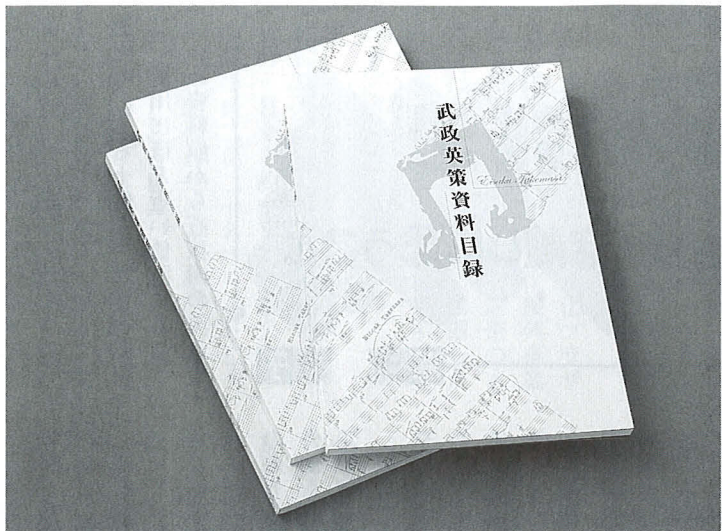
近森 敏夫	762/1167/1206
武政 英策	1410
不明	1251
不明	313/415/762/
不明	874/1164/1207/1217
武政 英策	846/874
不明	1348
不明	99/402/655-661/
不明	874/1217/1392
石本 美由起	57
不明	93
不明	388/1177
吉井勇	58
不明	891
不明	578/756/1469
不明	582/675/871/1216
不明	290
不明	216/1201
益弘 稔	1189
不明	650
不明	

今後、この資料目録が各方面で大いに活用されることを願っている。また、併せて、近い将来「武政英策作品」が、具体的な可能性をもって何方にも利用できるように、しかるべき組織や機関で早急に整理体制を整えられるようにご配慮いただければ、この資料目録の存在価値が、さらに明確に位置づけられるであろうと考えている。

（学教授）

◆「武政英策資料目録」は、ご希望の方に頒価二千円でお分けいたします。郵送をご希望の場合は、送料二百九十円が別途必要です。なお、資料の閲覧方法につきましては、現在検討中ですので、四月以降にお問い合わせください。

高知市文化振興事業団企画事業課
（電話）088-883-5071



武政英策資料目録

職場の事務室にある私の席からふと顔をあげると、鏡川の流れが見える。

鷹匠町にある土佐山内家宝物資料館は、鏡川にほど近い位置にある。とはいえ資料館から直接川の流れを

鏡川雑想 仕事の合間、窓越しに思うこと

藤田 雅子

ように私の席があるものだから、特に外を見ようと意識しなくても、外の光景が目に入ってくるのである。

昨年四月に着任したばかりの私にとつて、この窓から見える景色が高度で見える風景の大部分だ。見慣れた人にとつてはなんとも単調な風景なのかもしれないが、新任で、かつ県外から来た私にとつては非常に新鮮で、常に飽きることがない。

川辺では友だちと遊ぶ子どもたちや散策する人の姿が見え、夏には祭りや賑わう人々の様子を見ることが出来る。また川の流れに目をやると、釣りをする人や泳ぐ人の姿、カヌーの練習をする人が見え、その光景に驚くこともしばしばである。

しかし私にとつてもっとも新鮮に思えるのは、川そのものの表情の豊かさである。眼前の鏡川は潮の満ち引きにより、一日のうちでもその表情を大きく変える。海は見えないものの潮の満ち引きの影響は受けるように、朝は深みをもって緩やかに流れる川も、昼には川底が顔をのぞかせ、川海苔を採る人の姿がみられたりもする。これまで長く内陸部に住んでいたこともあるが、護岸されていて自然を感じることもできないような川を日常的に眺めて暮らしていた自分には、市街地にあつて川から

自然の営みを感じ取ることが出来るということに、当初は素直に感動したものである。

とはいえ、こうした自然の豊かさを裏返して考えれば、それだけ気候等による影響を受けやすいということになる。干満の影響が見られるだけあつて、本人は感じないものや、海から潮風が流れ込んでいるらしく、駐輪場においてある私の自転車は、いつも同じ向きに置いてあるせいか片側だけが錆が出るのが早い。またひとたび雨になれば傘をさしても下半身はずぶ濡れ

で、そしてその大雨の結果果川は増水し、去年は数度にわたつて（例年そのようなことはないそうだが）増水した川の水が河岸の遊歩道にまで溢れ出したりもした。

高知城へ居城を定めるにあつて、土佐藩の初代藩主、山内一豊は鏡川の治水を行ったという。ダムもなかつた当時、さらに力強かつたであろう鏡川と、長い間にわたる葛藤がありながら、その後も何とか折り合いをつけて付き合ってきた



2月1日、雪の鏡川風景

そんな訳で、私はこの窓から景色をぼんやりと眺めるのが、今ではすっかり日課であり、また楽しみにもなっているのである。

ふじたまさこ／土佐山内家宝物
（資料館学芸員）

大ホールに響け 歓喜の歌 市民が歌う第九シンフォニー

十二月十八日・十九日の二日間、かるぽーと大ホールの舞台を、合唱団員二百二十名・オーケストラ百名の総勢三百二十名がぎっしりと埋め尽くしました。入場観客数も、十八日―八百七十七名、十九日―九百五十四名と、ほぼ満席。「市民が歌う第九シンフォニー」の開幕です。

この演奏会は、高知市文化プラザ開館三周年・財高知市文化振興事業団創立二十周年を記念し、音楽のある街実行委員会との共催で開催したものです。演奏会へ向けた半年以上にわたる歩みをご紹介します。

◆結団式、そして練習開始

五月一日から約一カ月一般公募した合唱団員二百二十名は、六月二十日、初の顔合わせとなる結団式を行いました。この日は、演奏会までの長い練習日程の第一歩。さっそくパートごとに分かれ、約二時間半、聞き覚えのある第九のメロディーと耳慣れないドイツ語に触れたのでした。

合唱練習は、オーケストラとの合同練習五回を含め全十五回。最初の目標は、指揮者が来高する八月までに、ひとまず第九A合唱Vを形にすることでした。第九をはじめて歌う団員は、何度なくじけそうになりながら、自宅で練習用CDを繰り返して聞いて練習に臨みました。

合唱指導の先生方は、個性あふれる情熱的な方ばかり。その巧みな話術と指導で、合唱団員は、練習を重ねるごとにハーモニーを生み出す楽しさと喜びに気づいていきました。

◆指揮者は平井秀明氏

結団式から二カ月、猛暑の中、東京から平井秀明氏をお迎えしました。平井氏は、高知にゆかりの深い偉大な作曲家平井康三郎氏の孫で、新世代のホープとして今後の活躍が期待されている指揮者です。

平井氏は、二日間の滞在のうち、初日に合唱、翌日にオーケストラを指導。「演奏から土佐風の明るく豪

快な雰囲気を感じた」との感想でした。

オーケストラは、いずれも高知で活躍している、高知交響楽団と四国フィルハーモニー管弦楽団の二団体を中心とした合同編成。それぞれの楽団で練習を進めながら、指揮者が来高された際に、合唱団との合同練習を行うという厳しいスケジュールでしたが、秋の深まりとともに演奏にも深みが増していきました。

◆はじめての舞台組み

九月、合唱団とオーケストラの初の合同練習では、大ホールの舞台を本番同様に組み、舞台チェックも行いました。二百二十名の合唱団と百名のオーケストラ、楽器、いす、そのすべてが収まるように綿密に計算された図面どおりに舞台は完成していききました。合唱団の最後列が立つ壇上に上がると、視線はホール二階席最前列とほぼ同じ高さ。改めて、この演奏会の大きさを感じました。

◆ゲスト奏者・ソリストを迎えて

長かった練習日程も最終日。演奏会を翌日に控えた十二月十七日は、大谷康子さん・森下幸路さん・桑田積さん・古川原裕仁さん・間瀬利雄さんらゲスト奏者、そしてソリスト

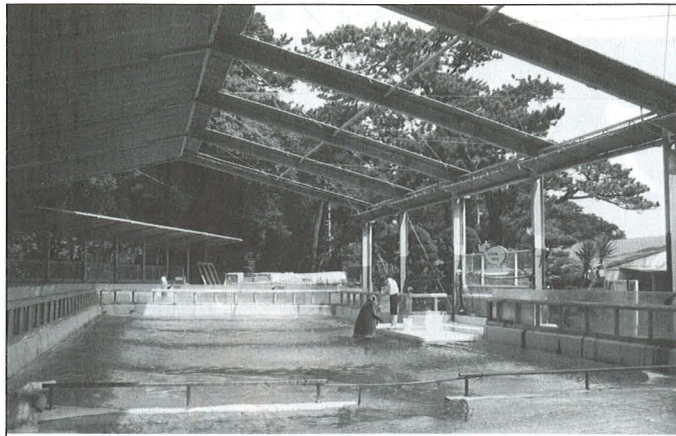
の島田美香さん・小原伸枝さん・馬場崇さん・小原浄二さんをお迎えし、本番さながらの練習となりました。出演者全員の志気も高まり、また、ゲスト奏者・ソリストが加わった演奏は重厚さを増し、舞台袖で聴いていた事務局の私たちは何度鳥肌が立つのを感じたことか……

◆感動の本番

いよいよ演奏会本番の開幕です。第一部は平井康三郎作曲の「土佐風土記」。曲中によさこい節のメロディーも取り入れており、懐かしさの感じられる素晴らしい曲でした。

第二部は、交響曲第九番。第一楽章からピンと緊張感が張りつめ、楽章が進むにつれてオーケストラの迫力が増していきます。第四楽章に入ると、ソリストの艶やかな歌声の共演とともに大合唱団の歓喜の歌が会場に響き渡りました。演奏が終わった瞬間、大きな拍手が沸き起こり、感動のうちに公演は終了しました。

今回は、高知県合唱連盟や地元音楽家をはじめ数多くの市民の皆さんのご協力を得て、このような芸術性ある演奏会を成功させることができました。同時に、音楽文化の裾野を少しでも広げることができたのではないかと感じています。（編集部）



静かなイルカショー

むかしむかし、夜、桂浜へはよく行った。浜辺には意外なくらい人がいて、それぞれなんだかムーディーな感じ。それをいつもぶちこわすのが「グエッグエッグエツ」と鳴き叫ぶ桂浜水族館のアシカたちだった。ちなみに、この日のイルカショーの観客はカップルばかり5組。決していつも行く場所というわけではないが、ちょっと癒されたい時にぴったりの場所だ。
(選/タケムラノオヤ)



風俗

バリに遊ぶ

物質文明の導入で、清潔、便利、スピード、豊かさが提示され、人々が欲望を肥大化させた結果、何がもたらされたか。収奪され、貧富の差が生まれ、争いごとが目を追って増大したのではなかるうか。ビーチパラソルを広げて悠然としている観光客の傍らを、「ミミの

先日バリ島へ旅行した。そこは年中バナナが稔り、マンゴが熟れ、米は三毛作という恵まれた土地、話に聞いた地上の楽園なのだろう。環境が整っているだけに、現地の人々はこのんびりしており、それに目をつけた外国資本の侵食はあからさまで徹底している感。

掃除をして歩くのは現地の人。僅か百円のチップを押しただけのも現地の若者、街へ出れば土産物を買ううとして群がってくるのも現地の人々である。文明を得るために、何か大切なものが失われてゆく感じ。誠実さや努力が報われるのは良い。しかし、富の蓄積、権力への階段は、ある種の非人間的な冷酷さ、自己保身を恬として恥じない無神経さが必要なのだ。人間性の貧困化を伴いながら、資本は資本を産んでいくのだらう。
同行の若者に「矛盾を感じる。弱者の切り捨てが目に見える。不平等だ」などと言いつつ聞いてみると、「いつまでも裸足で暮らしている訳にはいかんでしょう。能力差を認識しないのは甘い感傷ですよ。貧乏人のひがみ根性は棄てて、気楽に観光しましょうよ」と一蹴された。どうやら古めかしい書生論は流行らない時代になったのだ。
(3)

第21回写真コンテスト 高知を撮る 入選作品展

過去から現在にいたるまでの高知県内の出来事や風景、人々の暮らしなどを写真で記録し、高知のさまざまな表情を伝えるとともに、未来の高知のあるべき姿を考えていこうというコンテスト。「記録写真部門」「I LOVE 高知部門」の2部門で、今回ご応募いただいた約200点の作品の中から、特選、準特選、入選に選ばれた作品約70点を展示します。

また、今回は写真コンテスト20周年を記念して、過去の入選作品も展示。昭和20年代の写真から最近の写真まで、皆さまにお楽しみいただける内容になっています。入場無料。ぜひ、ご鑑賞ください。

会期：3月15日(火)～3月27日(日)
時間：午前10時～午後7時
(最終日は午後5時まで)
場所：高知市文化プラザかるぼーと
7階市民ギャラリー第1展示室
主催：(財)高知市文化振興事業団
〒780-8529高知市九反田2-1
(電話088-883-5071)
協賛：富士フィルムイメージング株式会社
後援：株式会社ラボネットワーク
高知県カメラ商組合

今号の表紙

「風景(仁淀川)」 和田通博

仁淀川は、私にとって、子どものころ水泳やエビ・魚取りをして遊んだ川です。河口周辺の風景はよく描かれていますが、私も気が向くとスケッチに行きます。今は仁淀川河口大橋や堤防ができて、ずいぶん風景が変わってきました。

(わだみちひろ)



高知を撮る

第20回写真コンテスト入賞作品

春の桂浜 (昭和31年 桂浜)

山崎 章男

小、中学校では遠足は桂浜と決まっておりました。私が20歳過ぎの頃に撮影しました。こんなににぎわっております。

「超過密」がもたらす最大の弊害は、生活に伴う環境破壊である。緑の喪失とともに、生活排水や農業による陸海水の汚染はとりわけ深刻である。溶け込んだ薬物のため、か弱いウニやカイの子どもは生まれてもすぐに死んでしまう。自然界の汚染は、ある程度までは微生物の力で、自然に浄化されてゆく。汚水処理の手間や経費も、人

「少子化」が春を呼ぶ

風俗歳時記



切るか、さらに、適正な人口(たとえば二、三千万人)にどのようにして上手に、「軟着陸」するか、衆知を集める必要がある。
「少子化」の遠い先には自然に包まれた豊かな未来が見える。暗い二コースの多い昨今、まさに、春を呼ぶ話題である。
(路)

口が減ってくればぐっと減る。悪いことが減るだけではない。土地に余裕があれば、当然地価は下がり、家も安く建てられる。近隣騒音や日照権など考えなくてよい。狭い土地を農業まみれで「有効利用」する必要がある。イタリアのように草にまみれたトマトを栽培することもできる。郊外に広がるゆったりとした野原や湿地、ヒバリの声も聞こえてきそうである。
人口が減ると国民総生産が減ると心配する人がいるが、人口減で無駄な出費が減れば、仮に人口も総生産も半減しても、ひとり当たりの手取りは何割も増える。
もちろん「少子化」は問題もはらんでいる。一時的ではあるが、「高齢化社会」をどう乗り切るか、さらに、適正な人口(たと

亜門版 ミュージカル

ファンタスティックス

人生はいつだって愛にあふれている。

それぞれの人の、それぞれの「愛」の物語。

ブロードウェイにおいて、史上最長ロングラン記録を打ち立て、日本でも長く愛されてきたミュージカル「ファンタスティックス」を、宮本亜門の演出により上演します。舞台上にも客席をしつらえ、お客様もまきこみながら会場全体が一体となる作品。美しい色彩、紙吹雪…。斬新な演出が温かい感動を呼ぶ舞台を、是非お楽しみ下さい。

亜門版ミュージカル「ファンタスティックス」

2005年3月17日(木) 18:30開場 19:00開演 **大ホール**

S席6,000円 A席5,000円 バルコニー席2,000円

脚本・作詞
トム・ジョーンズ
作曲
ハーヴェイ・シュミット
演出・振付
宮本亜門
出演
井上芳雄
大和田美帆
斉藤暁
沢木順
なすび
水野栄治
二瓶鮎一
山路和弘



ラ・ラ・ラ春まつり

with the beatles box 2005

出演

GACHO
ガッチョ/ブルース
CROSSOVER ELEVEN
クロスオーバーイレブン/ジャズ・フュージョン
MARDALES
マーダル仲間/ワークショップ
TRIO APPROACH
トリオ・アプローチ/クラシック
BEATLES CLUB BAND
ビートルズ倶楽部バンドとその仲間たち/ロック

ラ・ラ・ラ春まつり with the beatles box 2005

2005年3月21日(月・祝) 14:30開場 15:00開演 **小ホール**

全席自由 前売り1,000円(当日1,200円)

高知のアーティストプログラムに、みんなが主役の手作り音楽祭、ラ・ラ・ラ音楽祭が合体！今回はビートルズをテーマに、ブルース・ロック・クラシック・ジャズなど、いろんなジャンルのバンドが共演します。会場には、これまで開催されたラ・ラ・ラ音楽祭の紹介も、秋の本番を前に、ふた足早いラ・ラ・ラ春まつりで盛り上がりましょう！

かるぼーとミュージック・ストリーム

～未来に輝く若き奏者たち～



高知学芸高等学校コーラス部



県立岡豊高等学校ギター部



土佐女子中等学校コーラス部



県立高知西高等学校吹奏楽部

かるぼーとミュージック・ストリーム

2005年3月30日(水) 18:00開場 18:30開演 **大ホール**

全席自由 一般1,200円(当日1,500円) 学生800円(当日1,000円)

2004年度に輝かしい成績をおさめた地元高知の若き奏者たちが「かるぼーと」に集結！今回の演奏会は、本年度高知(四国)を代表し全国大会等で活躍した実力ある音楽団体による演奏会です。未来に輝く若き奏者たちの熱い演奏をお聴きください！

文化高知

2005年3月 NO.124



「風景 (仁淀川)」 和田通博

くもくじ

フラダンス 神話を踊る	ルアナ中川	2
「ジョン万映画」に捲きこまれて	山田まさ子	3
いつまでたってもビートルズ?!	森 薫	4~5
賢者は歴史に学び、愚者は経験に学ぶ	岡村 眞	6~7
太郎が笑った日	濱田善久	8~9
「武政英策資料目録」発刊に寄せて	曾我部修	10~11
鏡川雑想一仕事の合間、窓越しに思うこと	藤田雅子	12
市民が歌う第九シンフォニー		13
風俗歳時記・風伯		14~15

(財) 高知市文化振興事業団

文化高知 No.124 「隔月発行」
2005年(平成17年) 3月1日発行

財団法人 高知市文化振興事業団

T 780 8529 高知市九反田2番1号
TEL 088 883 1501 (代表) 郵便振替 016801514869

高知市文化プラザかるぽーと自主事業のご案内

お問い合わせ: (財)高知市文化振興事業団 088-883-5071

亜門版 ミュージカル ファンタスティックス

人生はいつだって愛にあふれている。

それぞれの人の、それぞれの「愛」の物語。

ブロードウェイにおいて、史上最長ロングラン記録を打ち立て、日本でも長く愛されてきたミュージカル「ファンタスティックス」を、宮本亜門の演出により上演します。舞台上にも客席をしつらえ、お客様もまきこみながら会場全体が一体となる作品、美しい色彩、紙吹雪…。新演劇演出が温かい感動を呼ぶ舞台を、是非お楽しみ下さい。

亜門版ミュージカル「ファンタスティックス」

2005年3月17日(木) 18:30開場 19:00開演 **大ホール**
S席6,000円 A席5,000円 パルコニー席2,000円

脚本・作詞
トム・ジョーンズ
作曲
ハーヴェイ・シュミット
演出・振付
宮本亜門
出演
井上芳雄
大和田美帆
斉藤暁
沢木順
なすび
水野栄治
二瓶紋一
山路和弘



ラ・ラ・ラ春まつり

with the beatles box 2005

出演

- GACHO
ガッチョ/ブルース
- CROSSOVER ELEVEN
クロスオーバーイレブン/ジャズ・フュージョン
- MARDALES
マーダール仲間/フークショップ
- TRIO APPROACH
トリオ・アプローチ/クラシック
- BEATLES CLUB BAND
ビートルズ倶楽部バンドとその仲間たち/ロック

ラ・ラ・ラ春まつり with the beatles box 2005

2005年3月21日(月・祝) 14:30開場 15:00開演 **小ホール**
全席自由 前売り1,000円(当日1,200円)

高知のアーティストプログラムに、みんなが主役の手作り音楽祭、ラ・ラ・ラ音楽祭が合体！今回はビートルズをテーマに、ブルース・ロック・クラシック・ジャズなど、いろんなジャンルのバンドが共演します。会場には、これまで開催されたラ・ラ・ラ音楽祭の紹介も、秋の本番を前に、ふた足早いラ・ラ・ラ春まつりで盛り上がる！

かるぽーとミュージック・ストリーム

～未来に輝く若き奏者たち～



高知学芸中等学校コーラス部



県立岡豊高等学校ギター部



土佐女子中等学校コーラス部



県立高知西高等学校吹奏楽部

かるぽーとミュージック・ストリーム

2005年3月30日(水) 18:00開場 18:30開演 **大ホール**
全席自由 一般1,200円(当日1,500円) 学生800円(当日1,000円)

2004年度に輝かしい成績をおさめた地元高知の若き奏者たちが「かるぽーと」に集結！今回の演奏会は、本年度高知(四国)を代表し全国大会等で活躍した実力ある音楽団体による演奏会です。未来に輝く若き奏者たちの熱い演奏をお聴きください！